

椿説弓張月

後篇

六

13
3908
12



13
3908
12

鎮西八郎 椿説弓張月後篇卷之六

東都 曲亭主人編次

第九回

路傍小病 時員缺小遣
籃に装られて朝推仇を殺す

朝推主後と幣に導きと。遠く西海の果にあり。豊後と肥後の邊に
宮原のうら過ぐ。阿蘇のかくとゆくほどに。時員驥心痛し
らに死ねざるおげえしう。さうら志が勵し。後世とあめりも千
剛敵をえい。肩とせがれ勇士も病あを務がうて動され。後
朝推主のついで宣ふや。や時員汝が幸多。今朝より悔げばええ
顔のさもほとく。し臥房のなれ旅寝あ。夜の衣も薄れ
風邪の言れ。あめりも。あじし彼処の樹の下に憩ひ。保養

春統時長月後篇卷之六

せまけしと宣へむ時員と杖に植る息を吐つ僕との二日と心待例あふ
 ぶらひがかくとやとば推君のこころ便なくおぼさるめ聖なるあつり果ん
 うして病を推くそまをふまけし病苦頻みりやゆきていふももとふ
 かしされどきじしまをふひて神を祈らる今宵の歌をてやゆゆく
 いざやと海易くおぼしめせしとらも若うたまきこられぬ朝推君と
 驚れ愁ひかゝてせむ昨夜の宿りに還通す醫師も診えたるを
 このそりには湯火を家もあふ縁も何ごも便なし夕露とぬくとも
 けぐ樹の蔭に憩ひこよと信中のに勤アと茅萱うたゝつとまは圓
 けゆして時員を居らせ懐より茶より出と飲したまはば時員感謝し
 堪じそ不覚お落涙し旅なればこそ推君に草の裾に布しきり
 ふ親くそり次賜はこと冥加ふのりていとかとし下野と出るといふ

露も宿り風に梳て長汀曲浦も雁か音とけくは故郷へ遣らん玉草かと
 えぬ夕風送れ鐘の声雨も曇りし遠樹の蔭腸を断るふかれ
 小孝行せし勝となりしかをば憂もあまらん歩み疲れしは昔
 塚の下にま在踏遥みくは紅日の影も惜み出れしも入るも時員
 杖も唯杖とも柱ともたのむおぼしめ病煩ひも却推君の心
 労を受もれこそ心苦しけれとわはに説け通るあかんととれみ歩
 こもまじげもや常かた世のたゞずまひと今更驚くおしものふねど
 身りよのまに黄泉の人とみれまらば聖よりと推君の推とよとが
 ぬゆれりの還りもあまふべたあま痛しやとりくえにらねどまは
 わられそ憂も迫れば病着の重れ首とあひくわ小草の上も轉輾
 ごと冬蟲とつ四つ飛出と裾のあつりに鳴虫の声も忽地獄よりけれ朝推君

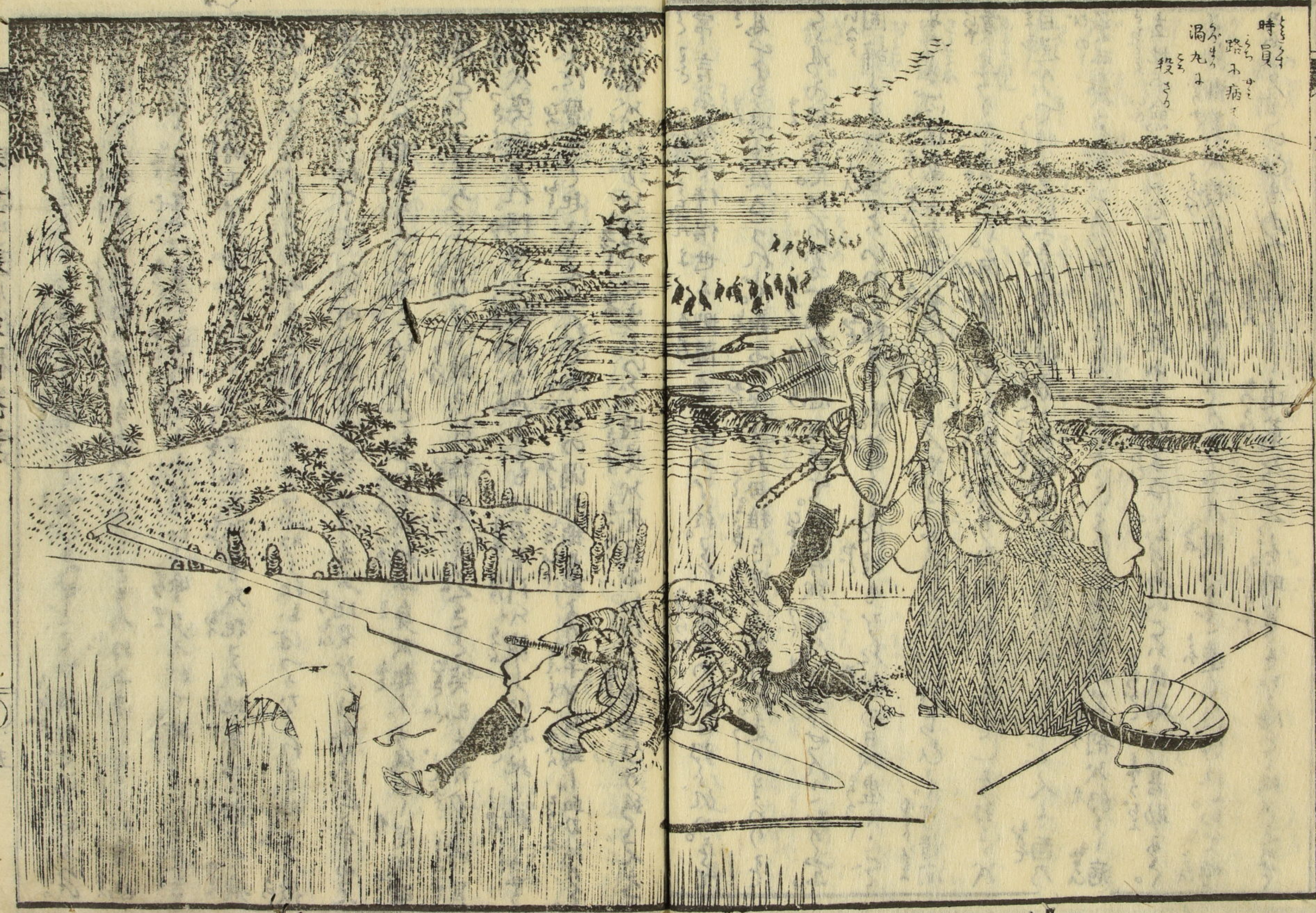
春説男長月夜篇卷之六

にははしく抱き起して脊に拵時員とらはいくぢやそまが死する
 いうありてこの長旅とむりせん。かれ病と氏神も救いもつたよしたれ
 程。主従が忠孝次神も哀とえそらへば。験もせよと祈念しつを
 けそぐにええなまふ時員と男の若しはより稚君のお入性たやめえ
 かやめんとおひや。経胸さしく。やうやくに死を接時員いつて死を
 ぞれそ水の中は掬のびく。飲もやとおいども。これえふにほそといふ
 朝稚ら。後天ひく。まふ末の露と揮よせつ。紙も湿して。絞り入。時員
 飲。多。これが末期の水さふん。とおひや。いふよりのゆくと。海の中
 合。物体なやともいひく。あれ苦惱と固。小泳。倍たり。浩処。小梅の端。大
 ね。やうな魚。藍。網。索。う。結。提。を。肩。に。海。鯨。解。刀。以。腰。に。帯。て。
 耳。の。の。り。これ。蜘蛛。の。渦。丸。う。り。この。癡。者。い。ち。る。嘉。應。三。年。の。秋。濱。岐

の逢日。大宮司。季範。が。船。次。切。せ。夜。影。の。支。黨。と。為。朝。小。刺。う。れ。その
 身。の。浪。の。底。に。潜。り。て。から。じ。て。脱。と。去。父。く。西。海。道。を。徘徊。し。近。曾
 と。の。け。り。に。め。り。と。い。ども。支。黨。な。く。形。り。て。後。を。果。敢。く。し。ね。り。も。あ。い。じ
 ほど。假。小。漢。を。こ。と。し。て。よ。う。海。づ。放。小。拳。動。く。人。こ。ま。櫛。の。ぶ。と。く。憎。之。鰐
 の。ご。と。く。怕。と。り。か。つ。て。渦。丸。と。この。日。直。入。の。入。江。に。漢。獵。せ。し。ま。る。獲。も
 ね。日。も。西。の。海。ほ。く。に。没。な。ん。と。そ。れ。程。小。梅。が。揚。釣。を。収。め。目。今。この。処
 へ。た。れ。て。時。員。が。道。次。小。病。臥。を。え。又。朝。稚。の。員。少。年。な。れ。ば。か。ん。て。
 忽。地。中。よ。か。ら。ぬ。と。は。發。り。この。旅。客。と。平。人。か。あ。ら。び。お。り。ふ。み。よ。う。海。に。た。ん
 の。家。難。中。か。づ。ら。い。く。故。郷。に。逐。電。し。主。従。か。く。寔。に。した。旅。次。を。お。お。そ
 め。な。れ。あ。ら。ば。彼。が。懐。小。物。の。れ。に。俱。した。男。と。勇。く。え。い。れ。と。病。煩
 へ。と。打。殺。そ。と。も。いと。易。かり。かん。され。と。泣。け。お。ま。く。は。し。し。や。が。這。奴。と。結。果

く。路浪を棄ひ。さて彼は少年が。大利の行童などに賣らば。足彼十二
分の酒價は。何れに。あつたり。と。肚裏に計較。する。酒の中に。笑を。含
め。少し。ゆえ。これ。お。し。つ。時員と。え。え。り。の。ま。を。悲。や。ら。ら。と。
な。お。旅。を。懶。た。め。の。な。お。病。人。より。も。少。年。の。は。こ。そ。あ。は。れ。を。か。か。り。て。
家。の。急。が。濟。し。良。菜。あり。年。暮。人。お。旅。して。試。お。お。その。切。神。の。お。じ。
少年。これ。も。も。に。其。中。を。進。し。て。お。と。り。て。朝。糞。飲。て。え。り。お。じ。
里。遠。た。と。な。り。て。猛。小。宿。の。病。田。に。お。り。て。醫師。を。招。く。に。よ。じ。し。其。許。の。家。
路。遠。く。は。誘。ふ。人。その。藥。が。な。り。た。と。言。は。し。と。言。ふ。が。時。員。笑。く。身。
記。し。い。る。それ。の。不。覺。なり。今。お。じ。に。憇。む。心。持。清。や。あ。そ。う。ね。へ。た。
え。も。あ。ら。ね。人。お。け。れた。う。ん。の。究。く。よ。後。り。か。じ。と。て。階。は。濁。丸。呵。く。と。
う。ら。笑。ひ。な。ど。て。か。く。人。お。疑。ひ。と。も。い。ふ。ぞ。が。家。も。さ。う。な。り。八。九。町。は。過。り。

常言。お。旅。を。伴。侶。世。と。側。隠。と。も。い。ふ。が。れ。これ。活。業。の。久。お。お。じ。の。と。て。
あ。て。も。進。む。は。な。り。れ。ど。家。の。老。と。れ。母。推。し。見。え。り。て。走。り。ま。り。り。と。
く。め。ね。い。せ。ど。は。れ。を。一。片。の。誠。心。な。り。て。病。苦。が。救。ひ。進。む。せ。ん。と。お。り。お。
同。辞。し。ま。る。強。て。い。い。し。鈍。ま。や。暮。る。に。寝。も。つ。れ。秋。の。日。が。盡。く。と。て。
お。わ。ら。ば。猛。獸。山。客。の。勢。い。な。り。ん。や。は。な。り。人。に。か。は。ら。ひ。も。可。惜。回。
費。し。たり。と。嘆。れ。る。阿。彌。の。か。く。走。り。ま。り。ね。朝。糞。を。お。じ。し。お。お。じ。
目。送。り。て。時。員。に。宣。ふ。や。彼。男。が。面。魂。い。と。お。り。お。じ。し。し。し。ど。人。も。面。乃。
ひ。の。笑。悪。か。つ。ん。と。その。あ。は。れ。を。ま。り。あ。り。に。ま。じ。か。の。家。れ。茶。前。が。好。く。病。
ま。地。お。命。の。た。こ。の。あ。ら。は。これ。お。じ。の。ま。は。お。り。に。い。氏。神。の。真。助。め。く。
と。れ。妙。せ。お。授。け。ま。あ。や。あ。ら。ん。ど。う。ん。彼。れ。ま。ご。遠。く。は。ゆ。じ。し。て。呼。
と。め。え。ん。と。い。ひ。も。あ。ら。ん。ど。忙。し。く。追。蒐。た。ま。る。ど。時。員。も。な。り。は。ら。め。り。と。さ。く。



時員
路不病
濁丸
殺さる

木言三郎月夜篇卷之六

木言三郎月夜篇卷之六

四

子。其の若しさもうち忘れ。ちや喃くと。びへせと。ちや後おにえせまりん。
 かして。うの時員を。朝稚のなり。まゝ今うくと。日る。お遠く。寺に。撞幽
 丹。草。集。虫の音。小。線。中。夕。れて。時。り。と。あ。友。を。
 の。雀。の。時。なり。丹。け。て。か。は。山。下。風。肌。膚。を。犯。され。地。中。で。徹。り。て。病。
 劇。く。い。と。い。う。も。冷。と。朝。稚。の。て。り。ふ。か。に。お。ぼ。つ。な。れ。を。伸。上。り。彼。
 男。が。い。つ。れ。ごと。く。ハ。九。町。の。路。なり。せ。ぬ。り。ま。比。及。り。お。ま。な。と。今。あ。え。
 え。ま。り。ぬ。鳴。呼。う。と。や。ま。ど。り。ご。ら。て。刀。杖。小。身。が。起。し。よ。ぬ。り。足。が。踏。
 掃。と。と。又。ま。ろ。く。と。か。な。顛。う。れ。指。叢。より。ぶ。と。と。突。出。と。朴。刀。時。員。
 背。が。突。徹。され。阿。呀。と。魂。消。る。声。も。に。刀。を。引。か。崩。し。に。撲。地。と。倒。し。か。せ。
 中。に。蹙。然。と。起。り。え。づ。れ。と。時。員。の。渦。丸。指。叢。より。半。身。が。頭。一。血。刀。が。り。
 指。徳。が。り。れ。徐。く。さ。ま。い。と。時。員。が。死。目。お。か。け。と。冷。笑。ひ。り。ぬ。く。え。て。

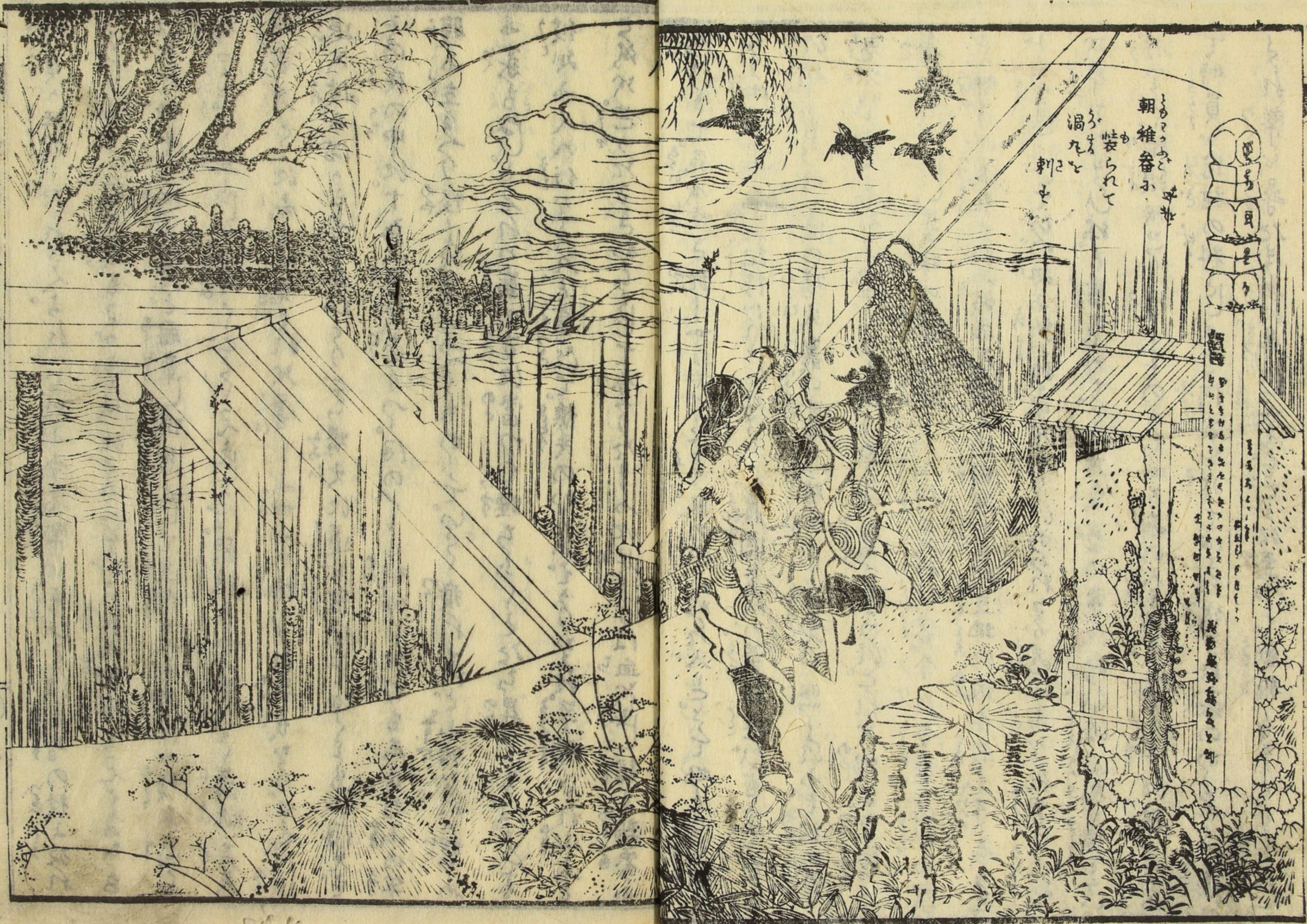
る。ぼ。つ。た。ハ。魂。の。猪。病。癪。と。り。れ。り。丹。刺。して。も。ま。と。死。を。さ。さ。ん。今。般。の。お。り。
 て。あ。つ。計。較。を。流。さ。せ。ん。苦。く。も。よ。く。笑。け。し。嚮。小。妙。藥。と。あ。え。ん。と。い。
 け。れ。も。又。家。あ。の。老。と。れ。親。稚。れ。兒。の。の。り。と。い。ひ。け。れ。も。そ。と。言。て。斬。り。ゆ。り。
 打。殺。し。ぬ。れ。け。の。お。り。と。り。又。彼。英。少。年。を。售。と。れ。と。後。く。久。く。環。會。され。
 夥。の。金。に。懐。か。暖。う。せ。ん。と。い。ひ。と。好。意。が。示。して。少。年。が。誘。引。中。途。に。
 埋。伏。して。大。庭。小。猿。を。か。と。る。魚。籃。の。中。に。う。ら。入。と。る。竊。あ。ら。ん。擔。来。
 と。り。口。の。洞。を。持。り。通。す。れ。ば。生。例。の。奥。箆。の。中。れ。を。な。げ。し。け。れ。と。外。を。ら。ら。服。
 乞。して。成。佛。せ。よ。と。嘲。呼。し。件。の。魚。籃。が。指。叢。の。蔭。より。と。る。と。い。ひ。と。い。ひ。と。
 時。員。と。て。い。と。ご。か。り。に。歯。切。て。眼。が。腫。ら。し。病。く。進。退。自。在。な。れ。ぬ。け。り。
 ぐ。と。小。賊。が。ぬ。き。撃。た。れ。の。こ。り。と。主。君。が。擣。に。せ。れ。わ。れ。か。ん。と。武。
 運。の。場。と。れ。ぬ。よ。や。こ。の。野。の。雲。と。消。も。一。太。刀。恨。で。や。い。と。い。は。ま。た。と。刀。

と引技渦丸が向鷹入雉人ととられ、跳こそく丁と蹴り、泥足揚へ時負
が刃を踏居て動せ、眼が睜声、うき小賊とは言可、あや、それ四圍
ありて、蜘蛛の渦丸と叫れ、支堂、數十人を集合せ、よろづ殺しおりの
さばりにこぼしたる、あはれ小故、あつ、支堂、喪ひ具へ、に誓
と、と、ども、汝、屠こ、木偶、毀より、易し、いで、この世の暇、ち、と、それ、を
といひ、も、あ、ご、刀の鞘、食、あ、中、時員、が、呪、大地へ、と、刺、と、お、せ、い
鮮血、あ、ご、ひ、漬、あ、中、は、同、撥、死、り、り、け、嗚、呼、悲、あ、る、痛、し、た、あ
正、ふ、是、万里の黄泉、旅店、り、く、と、魂、六、魄、誰、が、家、お、落、ん、い、とも、墓、か、れ
最、期、分、り、その、と、れ、渦丸、と、刀の血、拭、ひ、か、ら、あ、時員、が、衣、服、浪、と、棄
ひ、と、ろ、く、網の外、より、魚、籃、を、と、し、歌、を、少、年、か、つ、た、に、も、驚、お、れ、怖、れ、る
せ、も、それ、決、して、汝、を、殺、す、高野、大師の密、絡、を、甘、ぢ、れ、大、刺、の、旨、後

に、信、の、と、い、ふ、と、稀、な、れ、獲、あ、り、て、今、魚、と、人、魚、と、両、方、を、お、り、ま、り
幸、あ、り、と、わ、く、そ、あ、く、中、を、く、魚、籃、を、脊、負、つ、小、唄、を、う、て、あ、り、し、く、
痛、し、や、朝、稚、を、嚮、小、渦丸、に、お、れ、時、員、が、病、多、く、救、入、と、の、と、お、ほ、せ、
かは、只、音、渦丸、を、追、蒐、を、う、ま、れ、渦丸、と、中、途、小、埋、伏、し、く、矢、突、朝、稚
を、縛、り、は、め、て、猿、轡、と、い、ふ、の、を、銜、し、く、魚、籃、の、中、に、投、入、し、網、を、あ、ら
と、結、び、と、め、足、を、踏、て、小、り、り、し、終、小、時、員、を、殺、し、て、行、李、路、銀、が、掛、て
く、棄、ひ、と、れ、を、朝、稚、と、魚、籃、の、目、の、隙、より、え、し、し、り、て、い、と、巧
と、く、お、ほ、せ、し、く、既、小、網、裏、の、魚、と、な、り、て、と、れ、が、救、ひ、く、雙、が、復、そ
る、が、あ、ご、あ、ご、び、渦丸、が、脊、に、負、提、れ、し、ゆ、れ、ま、る、あ、い、い、く、は、鉗
ぢ、れ、と、れ、を、物、と、し、い、ひ、が、と、れ、縛、の、索、お、の、づ、ら、緩、に、し、う、は、密、小、あ、り
鮮、と、暗、更、の、短、刀、が、抜、出、し、魚、籃、の、中、より、渦丸、が、背、を、と、と、刺、し、入

ぞ刀尖白くあふりて流る鮮血り流とも一声叫びて倒るるを朝
 推ひりりと刀がりて上なれ廻りて杖擲りて撥投棄て対面へ跳り出
 渦丸が返撃りて廻りて刃が胸におり當て責なまふやう窮鳥懐小入る時
 と獵師もこれぞとてあつれぬ汝人の病卧されとてく好悪を放は
 みつら名告ぐその不仁小誇れとそいと憎へれ癖者我吾不意小傳
 られぞとていづここの魚籃小装ふれとれ時員とて病臥をたのむげと
 みてう汝小勢れべと天罰かりひちれしと罵りて咄らひとて胸前を
 刺し入は忽地息絶りかて朝推と時員が為小仇を殺して立地不
 憤りやとてに似せられ日られ道遠くして進退らに突了寶曆の伴
 次りしなひ楓橋の林小離れとらしつ時員が亡骸とけすおる夜の中
 獣の倒考るるものりなんとせんがせんとかりひもひまひの伴とて

死はきて死な抱さ起しやうやくに魚籃の中へかた入とて咄とらる紙を
 とり出し記はけんとしたまふ小膏闇なれば筆の運びも定うなら
 び折しものれ一團の燐火叢の中より燃出くまえ照るはあそ秋の螢
 鬼火かと怪しみおくらやうこそあゆめとて驚きまづこれ火燭み束ねた
 筆がとり出し墨斗の墨を塗り同行二人の旅客今月今夜との処小お
 り時員の渦丸といふ賊の為にその侶を勢れ立地に仇を殺し了まると
 といふ望遠してりが処折るるやとてあられまふよ侶りて男の亡骸
 灰葬りたりと書さめてこれ魚籃の索に結び添渦丸が懐とてい
 撈りて踏浪がとり復しそのうら四五両の今魚籃の中に踏しとてあ
 て時員が棺材の料とて何方を舟てゆが宿る家のおらんとして齋
 らに幣が尋たまふに弗にええとてらに至つと朝推とてまてく仰天し



朝雅あさたか番ばん不ふ
装まらられれて
渦うず丸まる
刺さし

林語日張片後篇卷之六

林語日張片後篇卷之六

1888

時員、枉死したれ人よ。これへりたお今亦幣紙出ひは目暗の杖よ放れ
 とぞうぶく。往も還もこがく為にさりワ。この氏の御神も。えとあらる
 ひとれ領。その何とせんと。周章。惘然として。立在る人。燐火の類。高き
 揚。低く照らして。導くごとく。えんじう。朝推を。曉はく。落涙。差夫
 時員。自らに死して。魂を。導くよ。世も稀な。忠義なり。さらば進
 退。彼。ほつと。と。と。と。燐火に。道。照らして。ゆくも。おほえぞ
 その夜の中に。十五六里。走りつ。ほのぐ。と。明ゆく。比。名も。あらね。山の半
 腹。ふ。ま。ま。り。怪。し。る。り。あ。く。も。め。で。い。く。疲。れ。た。れ。と。山。踏。な。れ。い。こ。い
 再。家。も。ほ。と。それ。の。巔。の。方。に。當。つ。く。煙。ら。く。と。たら。昇。正。じ。な。ま。て。と
 彼。必。小。人。の。位。な。ん。と。良。ひ。て。樵。夫。の。か。う。ふ。ら。り。な。れ。羊。腸。な。れ。山。と
 と。流。火。芒。う。や。こ。ま。から。じ。て。登。り。な。ま。に。足。より。は。血。が。出。し。裾。を。朝。衣。お

添。濡。つ。その。と。ら。後。入。到。と。ま。ハ。果。して。一。箇。の。山。寨。の。り。け。か。れ。流。山。の
 似。け。か。れ。由。緒。め。れ。人。の。住。居。と。と。え。て。尋。常。な。れ。家。の。建。ま。あ。へ。の。り
 を。少。し。入。り。と。れ。必。脚。門。の。り。の。と。ら。後。ま。後。門。な。れ。折。じ。守。人。も
 ま。り。じ。か。ぞ。つ。と。入。り。て。こ。ん。ま。は。雌。子。の。か。ら。の。苑。と。お。ゆ。く。て。黄。檣。撫。い。ろ。く。に
 漆。は。し。と。れ。が。松。木。は。び。と。せ。の。と。妙。なり。枯。け。し。と。れ。生。垣。の。木。の。間。小。小。の
 嘯。れ。声。秋。情。が。信。し。け。く。と。こ。入。れ。渚。坊。戸。の。半。開。て。裡。あ。の。藤。長。も
 美。婦。と。六。ッ。七。と。な。り。か。れ。男。の。童。と。符。念。も。な。く。木。の。子。が。拾。ひ。て。を。居。り
 け。れ。正。ふ。足。桃。源。も。漢。魏。も。同。進。し。人。仙。窟。も。崔。娘。を。觀。窺。と。れ。故。事。あ。ま。と
 似。り。り。け。し。抑。こ。の。と。ら。後。肥。後。國。益。城。郡。木。原。の。山。中。に。只。今。木。の。子。が
 拾。ひ。美。婦。と。白。道。男。の。童。と。舜。天。丸。なり。為。朝。衣。の。山。小。と。り。あ。ひ。し。る。
 ま。も。七。年。の。春。秋。が。行。く。舜。天。丸。六。也。母。なり。あ。ひ。つ。よ。流。つ。お。と。た。む。く。

その怜悧るや蒲衣伯益が女おいしけりかればりう人小とせ下とて寧ろ
あゝ養育するは得とて乳母ももけりば為朝ととの本の朝もど兒小宿願の
ふりありして紀平治成りて阿蘇の社へ詣りしにがらふりたりとて時堂と
山田の早稲刈入れんとて草野おゆさねよりて白燈親子侍成りて
く漫小死にま出木の子が拾ひておりせしお今とてはも朝稚の庭門小境
て入りて是か人家刀自りておばせしは至成りて白燈小對しおのれ
と東國よりおられし母成りてお母のなり。あゝお昨夜思しる時
堂あ後れり。この山小迷ひ入り珠さきに疲しければおび麓へ下れりとも
あゝねわづらは雲時憩しおひぬ。とて白燈はくくえりて怪しむこの
山と昔より山の神れ漳たしあとして樵夫もくりては登りし事と。あゝおは
只ひとり迷ひまふりて意おほねえまこの家と人お訪れりておびと
かき地小いれりてお母にけり。あゝおはひとてお思まへりしに
おも何國より身多ひまればお若め人と同人も。おはくもとて雲の公隔てり。お
おぼつろくぞええま。

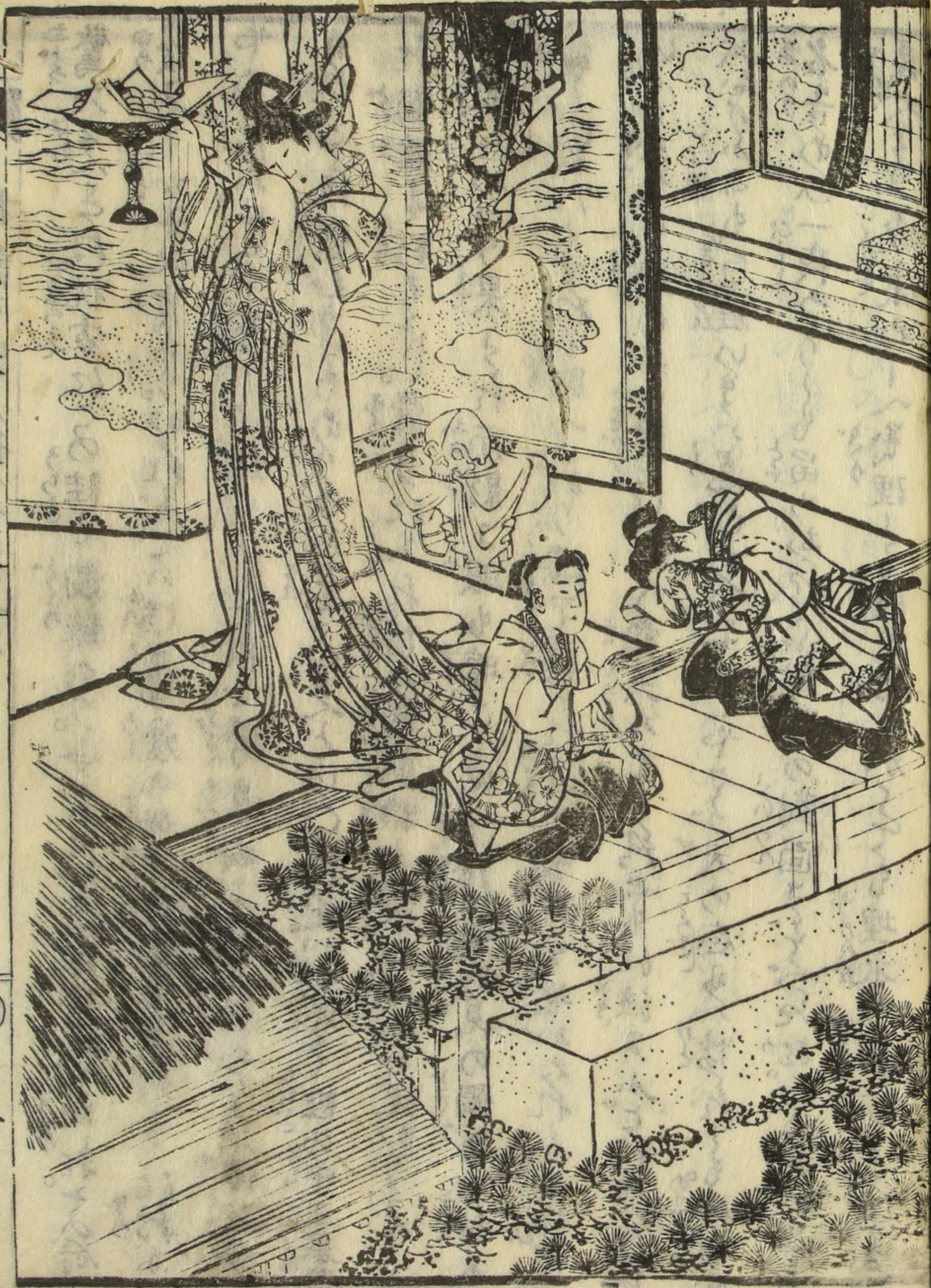
第三十回

雁回山小孝童父母成素
水俣濱小漢夫為朝を祀

朝稚と彼婦人お本貫と同行し今を思はしりて。あゝお下野咽足利の
そのかたれは彼知りて生れりおあめりて親族のありお養れ七女の夏より
六年の身り。又七年の秋成孫と物と。おはらねと只悲しは七年の親
抱見せののりも。非命にらの世成去と。世の風声に信せ。迷城へ東の
あゝおは隙のめりとも。せめて假寝の夢おなりとも。今下りて父母の
あゝ人と且暮に氏神小祈りしにひりて。近曾不思議の示現と。あゝ

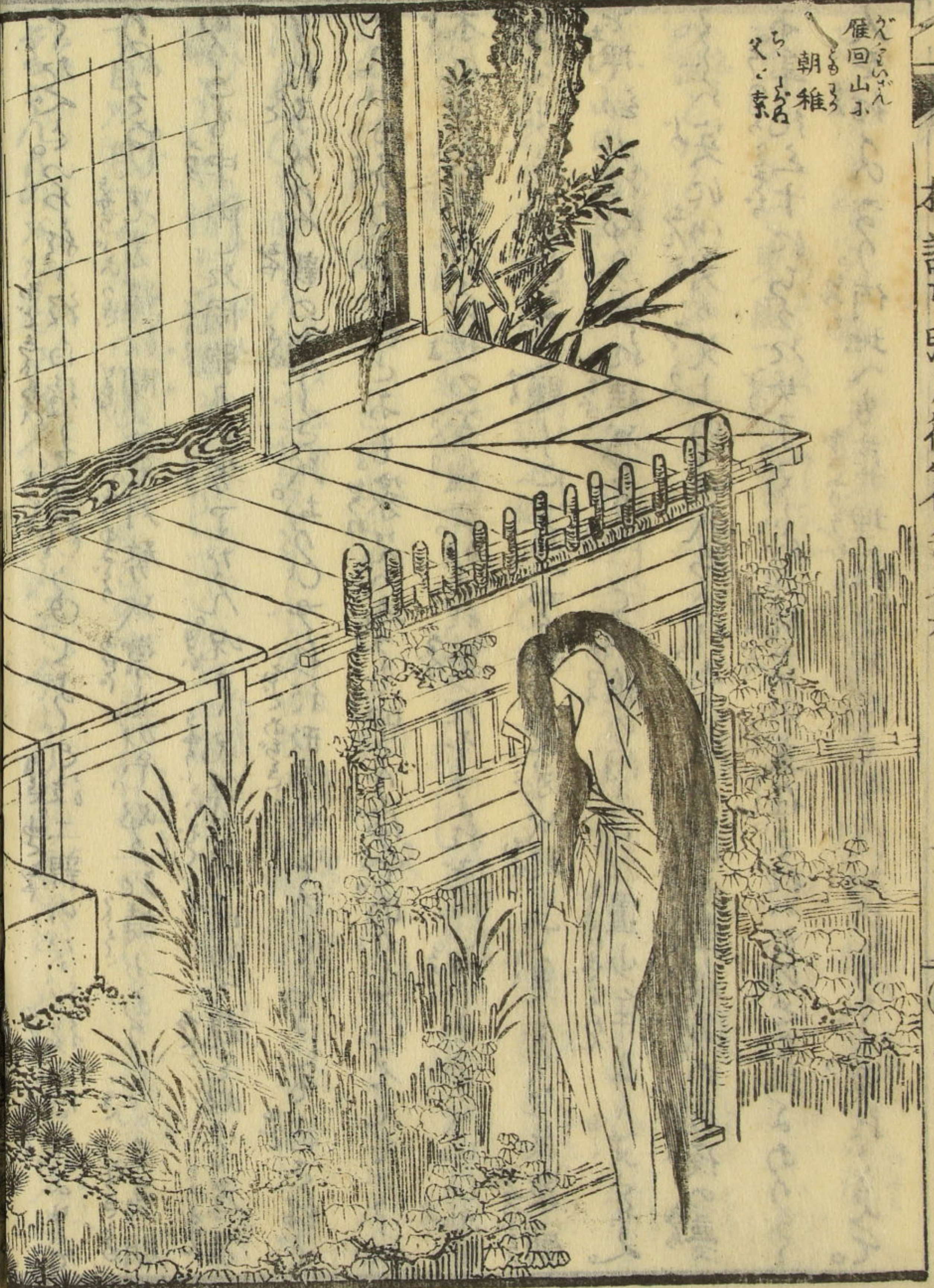
忘れよすぐはめづれば。何れもその世に。短は親子の因。そと
 おりひとて東國へゆり。養父君よあり事。その家や嗣名と揚。武士
 の濫となりあり。とれおすと孝とめ。せよと声も涙も。是れ
 の山の兩私に。朝稚と。言の家の。た。おれぬ。あてその人。言。嚮。あり
 精し。多。ごも。喻。お。道理。お。ぬ。び。同。ん。や。う。も。な。く。と。あり。落。れ。涙。や。拭。ひ。
 後。つ。か。父。世。お。め。り。ご。も。我。と。ち。り。て。名。告。な。ま。い。と。宣。さ。と。れ。お。い。て。え。め。し。
 う。せ。け。れ。る。せ。せ。し。の。世。お。め。り。ほ。を。知。り。て。ゆ。は。辛。あ。く。と。ま。く。ま。
 ぼ。れ。う。ひ。も。め。ん。密。お。名。告。と。ま。く。も。世。お。滑。お。親。の。行。方。と。子。と。して。人。お。
 漏。れ。ん。や。情。を。慈。悲。と。あ。じ。て。と。か。れ。に。説。く。人。を。舜。天。丸。も。り。ひ。は。し。
 て。目。お。拭。ひ。中。よ。母。お。つ。か。お。め。り。の。や。う。お。れ。兄。上。の。は。し。と。ま。は。樂。し。く。接。ひ。
 言。え。ん。の。成。な。も。と。れ。人。お。在。さ。ね。ぞ。今。より。その。子。お。せ。ぬ。お。た。つ。か。兄。上。は。し。

くた。と。つ。れ。お。白。癡。と。思。ひ。て。よ。と。泣。二。親。の。が。れ。後。へ。同。胞。よ。も。も。
 の。と。は。見。お。牆。に。聞。こ。も。外。勢。お。禦。と。か。平。ぬ。た。詩。お。あ。り。と。ま。く。良。朋。
 の。ご。も。中。め。した。同。胞。お。の。方。ア。かん。況。く。兄。弟。莫。逆。あ。て。親。と。ぬ。う。孝。順。
 され。子。お。り。親。の。樂。し。さ。ぬ。お。り。ひ。や。れ。形。な。や。その。ち。ら。は。し。も。宿。さ。ね。と。
 れ。あ。も。子。の。お。も。家。兄。お。あ。う。も。四。り。ゆ。で。め。り。と。な。つ。え。て。と。れ。
 木の。く。か。ご。も。な。れ。世。の。義。理。よ。か。れ。歎。れ。を。す。れ。ぞ。し。悲。と。さ。す。め。い。ひ。お。て。
 痛。が。ま。う。に。し。も。ひ。る。と。賺。し。に。ら。ん。や。う。に。お。お。起。て。奥。ま。う。た。れ。家。廟。
 と。押。お。した。ぬ。り。と。れ。桂。お。と。り。出。て。朝。稚。の。ほ。ろ。り。に。置。少。年。よ。く。お。え。ん。
 ころ。の。實。に。心。お。が。父。上。の。み。お。あ。ら。じ。あ。う。お。ふ。この。七。年。以。お。め。れ。夜。の。夢。
 お。年。紀。と。十。に。ら。う。た。女。子。と。い。か。が。枕。方。お。立。在。た。れ。この。と。こ。な。り。め。り。と。
 人。を。お。の。り。何。地。へ。も。葬。埋。お。め。れ。せ。と。に。お。り。と。ま。く。と。告。お。と。ら。ん。



古今和歌集卷之六

十五



久遠の
雁回山小
朝稚
父の
素

古今和歌集卷之六

十六

驚にえまは。枕方にこの袿と觸體のり。今もこありへをぬが面影その耐
爰え一女子に背より。かれどこのはえが産の母子あて。その子ににけふ
やめりけん。はしや爹に達せし。これを携東國より。そのかた赤紙吊
もつ。こは慰むさもありあん。是えまといひく。引ほく袿の中は暴
に觸體を朽そくし。骨身に入れ情の賜朝推と涙の間ふ。とえかうえそ
押戴た。かり果され面影は眼も暗く。消残形見の觸體と袖も
載し。しんとすれと胸さかり。漲て落れ涙の曝布と堰かれ。白縫も
いふ。玉も膝の上。小携はたぐ。衆天丸も。りはさもに泣きか。これ又彼
次おりか。白縫い。思ひのどし。やう夫の志。あ情れも。明白
名告のひ。一夜ありとも。留めおれ。親子の對面。さづけた。い。き。して
良より。我康やへ。我理と。い。ともかく。埋木の。花。よ。う。う。う。

親を元の浴へ潜ひのり。清盛と唯雄が決。彼母勝とも負れ。も。活
ゆ。ね。夫夫婦の。長。も。あ。れ。魂の。緒。不。恩。愛。に。結。れ。人。の。信。義。を
缺。て。さ。つ。が。才。む。つ。の。誤。り。い。へ。て。ま。又。又。の。な。り。や。ま
少年主人。その。か。阿蘇の。神社。お。詣。り。し。ま。り。な。り。と。奴。婢。も。山。田。の
稼。お。違。ひ。れ。御。養。應。も。意。に。あ。う。せ。と。山。が。う。れ。木。の。子。の。お。あ。り。の。に。あ。け
と。と。飢。渴。凌。ぐ。む。め。り。に。も。栗。の。飯。も。さ。づ。れ。ど。し。い。ご。進。ら。せ。ん。と。ま。ま。あ。ん。
朝推忙しく引とめ。驚に小胸のこ。ぬ。さ。り。て。物。は。あ。う。は。ゆ。ら。と。母。の。觸。體。を。賜
命。の。氏。神。の。示。現。は。違。移。と。父。の。み。か。さ。ひ。と。え。直。に。ゆ。り。ゆ。ひ。ま。ん。と。し。父。上。の。存
命。さ。へ。ふ。さ。ふ。さ。ふ。も。あ。へ。下。野。な。れ。朝。推。が。あ。り。し。と。傳。入。て。さ。へ。迷。憾。や
と。ば。う。り。に。像。見。の。袿。う。ら。疊。涙。お。畏。む。白。骨。に。お。く。家。の。方。を。忘。れ。る。白。縫。の
臂。近。な。れ。盒。の。内。より。金。の。鞆。一。對。を。さ。り。出。し。こ。の。主。人。が。お。り。に。年。來。秘。藏。

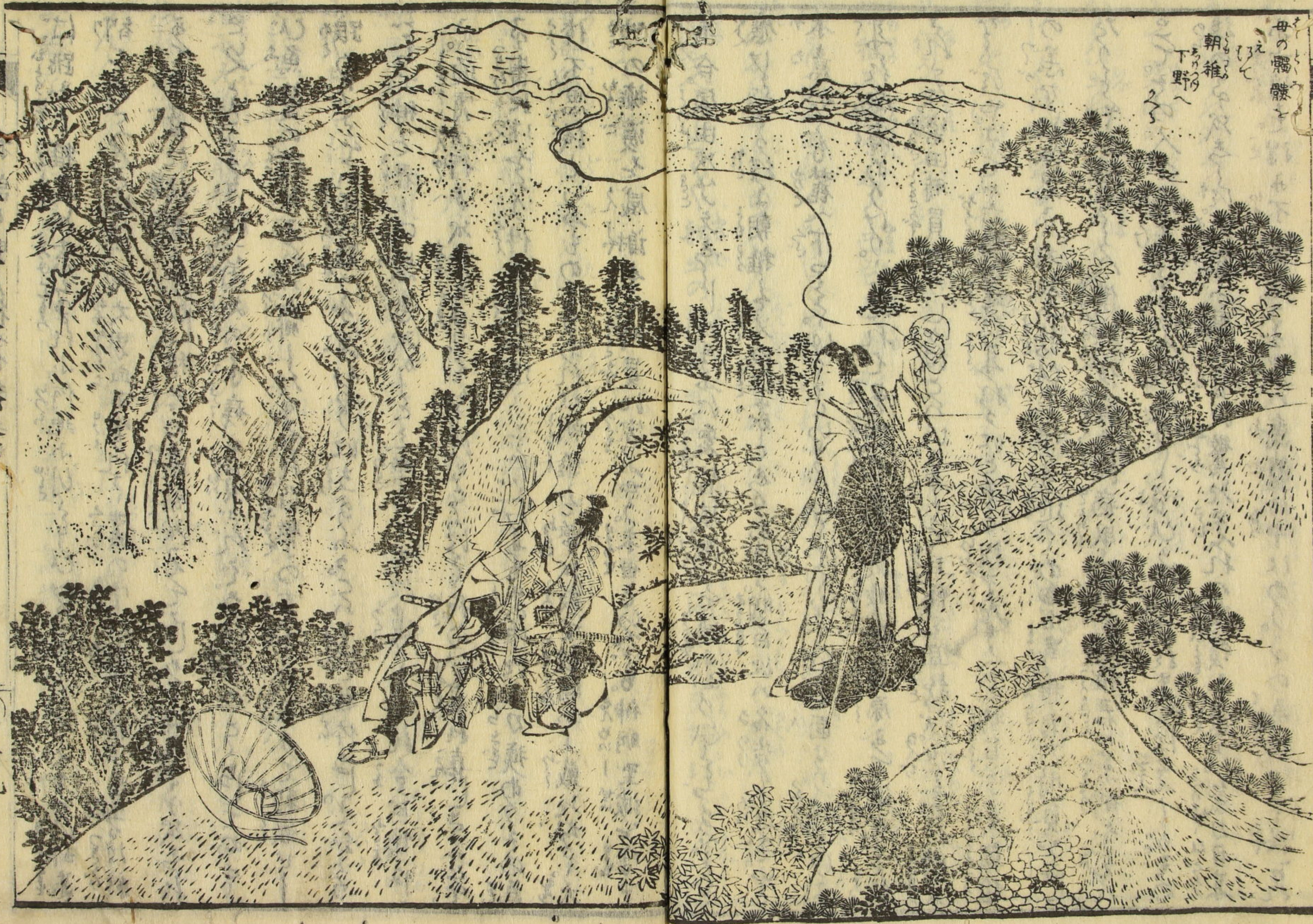
の物なれど家裏に進むは下野まで道のほどもいと遠けれど津の導
 たる旅路めめ恙なくして着しなまらぬころこよりのも且まに舟のそ
 次折れおとそいふまでには舟もゆくとや宿借り。天のけぞら出さず
 名もあつぬ菌鱗が魚人ともゆればとてなうへまひそ。奴婢が草野へりて行
 とく。飯盛りたれ割籠らにあり。これ次携ゆれまらぬ一日の飢い凌えん
 鞆次遺したまひそ。とりひつて取てまて違は。割籠次腰へ著し。後みし
 帯を締添れ。首も力弱く信中に勲とて。路程をまのりし中とらぬ
 著しは朝稚も鞆次おしひて懐に扶主人の細莪をまのれとの重宝
 次賜れたる。母の鬮腰ふ劣らむ勝らむ。父の像見の公持ぞとて。路程を養
 父の恵次はく。その准候とてぬかり。ねがはは自愛して不老の門小春秋と區
 不死の仙姑となりなまらぬ。まが東國よりつて。月と日の入れをえん。父母は彼方

小倉とれと。おのりまらぬ。慰めか。明一をまて。おほいよ。叮嚀も別とて去
 舜天丸も暇乞して。件の桂次齊に負。草鞋穿あめ出さる。舜天丸の名残
 惜し。母君も送らぬ。送り出さして。兄上めは。うりまらぬ。慌し。ゆりまらぬ。
 り。ゆり又。母のよ。あじ。留て。母のまらぬ。ゆりか。後。寛
 白癩も。暗間。か。袖の。両。ま。か。あ。け。朝稚。ま。は。白。え。せ。じ。と。足。や。母。
 麓の。か。え。ま。り。な。ま。ら。ぬ。白。癩。ま。け。ぐ。と。赤。う。ら。ま。ら。ぬ。目。送。り。果。流。追。あ。ま。ら。ぬ。
 子の。ま。ら。ぬ。り。て。舊。の。と。ま。ら。ぬ。り。り。又。洗。こ。ま。ひ。け。れ。活。小。次。の。間。の
 蒸。糲。次。と。同。じ。な。ま。ら。ぬ。人。次。誰。と。え。ま。ら。ぬ。む。為。朝。な。り。紀。平。治。又。その。後
 かに。の。り。白。癩。ま。お。り。ひ。つ。れ。ど。と。ご。かり。に。出。居。の。か。え。居。ら。り。な。ま。ら。ぬ。む。為。朝
 と。白。癩。ま。對。す。ま。れ。嚮。み。所。蘇。より。ゆ。り。ま。て。紀。平。治。と。こ。も。に。朝。稚。が。ま。ら。ぬ。む。
 り。又。ゆ。り。ひ。つ。れ。る。の。一。五。一。十。を。竊。ま。ら。ぬ。む。下。り。ひ。の。彼。が。純。孝。次。感。激。し。

柳田三彌戸後篇卷之六

又下とびつと。悲しき。慈悲の深きを嘆賞し。密に外面より撓り入りて。其の細くたがはれり。さて微妙もたらひありのうね。あうお小朝稚が宮原
みて。梁田の時員が替れ。その仇蜘蛛の渦丸と殺せし。物語は付けたり。
かりしおれ。彼渦丸といふ癖者。往歲に瀬崎を逢日の浦にて討漏
らしし。剛盗なり。朝稚今や。十三歳の小腕にて。家隸のあふこの賊に
殺し。うにふらうて志を述。その勇その孝義。康が子とこは。足れり。これ
又何をう愁ふぞ。たうて。氣色よくええ。身人は。紀平治も。又白雉を慰め
朝稚が稱賛も。己ごと。為朝か。まじて。それらの山も。さぶらうて。と。や。七年を
経る。世も。あはれ人の。しと。あひけ。お小朝稚。不思議。小索。取つれ。お。後。お他
人の。あはれ。とも。の。り。なん。軍兵。全。か。ふ。び。とも。潜。小。打。ま。う。屍。次。華。落。り
曝。さ。う。と。う。そ。く。船。出。の。用。意。せ。よ。と。仰。く。高。岡。太。郎。夫。婦。以。下。の。侍。を

集。合。縁。由。が。せ。え。あ。う。し。な。ま。ふ。に。衆。皆。感。激。し。て。速。小。あ。り。い。と。い。ま。ふ。と。と
應。け。れ。う。後。う。朝。稚。と。又。の。住。家。と。あ。り。お。が。う。明。白。に。の。名。告。も。達。せ。い。と
本。意。お。も。麓。へ。下。り。ゆ。く。こ。い。ま。さ。い。く。な。い。は。前。面。より。忙。し。け。ぬ。
お。後。旅。客。あり。けり。こ。え。れ。を。是。別。人。の。は。昨夜。宮。原。めて。渦。丸。を。殺
え。れ。と。梁。田。時。員。あり。し。う。は。こ。い。う。ま。と。て。且。怪。し。且。欽。び。汝。と。これ。時。員
か。ら。び。や。こ。い。の。亡。魂。の。迷。ひ。あ。わ。ら。に。と。と。と。時。員。と。又。朝。稚
の。恙。な。れ。ぬ。え。と。大。れ。お。訪。び。と。ほ。う。り。近。く。の。物。を。寄。稚。君。ハ。時。員。を。死
たり。と。や。お。ほ。さ。う。ん。僕。昨夜。宮。原。に。病。臥。され。と。稚。君。ハ。お。前。を。を。ん
こ。て。その。人。を。追。蒐。し。ま。う。み。ぬ。お。び。え。し。は。お。ま。を。は。え。い。う。が。その
後。の。う。み。ぬ。と。天。飛。ぶ。雁。が。音。に。驚。れ。と。それ。ハ。病。頓。小。愈。と。氣。力。日。来
小。十。倍。を。得。ぬ。不。審。と。う。が。身。ハ。魚。籃。の。中。に。あり。の。為。体。い。う。怪。え



木説巨野月後篇卷之六

母の駕籠

朝維
下野へ

木説巨野月後篇卷之六

七

は跳出づ。稚君は素を多れ小。何地ふじとまひけん。進く入るえまのり。却某
削をぬへんとしひつれ。大男血を塗れ。叢の中に死す。折しも物も月経
めて魚籃に結著し。稚君の遺翰をよみて。じりて涙丸が。子次を
とくとも。多敷に一箇処の。子疾も負だれ。まほ夢の。ららしてぬ
ひ魚籃の内。又それの。齋したる。白幣の。真中。又及びて刺徹せ
跟のり。さて正八幡。かみあうりにまゐる。ふさし。物体は。しと。い
ごつて。神と君との恩恵。次が。と。幣。さ。も。に。遺。し。も。人。れ。今。又。懐。は
と。通。宵。行。か。次。素。も。あり。も。か。ら。は。も。う。は。行。め。い。も。れ。喜。し。と。ま。そ
る。審。に。起。を。り。件。の。幣。を。進。く。これ。じ。け。も。中。に。太。刀。獲。あり。その。為
体。不。思。議。と。い。ふ。もの。も。う。の。れ。朝。稚。と。幣。取。て。数。回。土。一。戴。た。好。う。大
陸。の。擁。護。を。感。謝。す。時。員。に。宣。ふ。か。う。未。世。と。い。ふ。も。神。明。至。誠。と。守。り

夜。あ。る。斯。の。こ。じ。これ。昨夜。燐。火。に。御。導。せ。られ。く。彼。処。の。山。寨。に。到。り。
實。母。能。江。の。觸。體。死。び。たり。彼。燐。火。を。汝。が。亡。魂。の。道。次。照。ら。と。か。と。か。ひ
け。れ。お。さ。て。能。江。の。導。た。く。この。山。小。誘。引。へ。れ。なり。か。れ。る。う。え。の。り。し。と。て
白。綾。の。い。ひ。諭。した。り。え。れ。の。舜。天。丸。の。の。お。ら。も。形。く。は。え。ま。じ。し。と。入。る。
時。員。あ。ら。く。嘖。嘆。して。その。疑。ふ。べ。う。もの。な。ね。御。父。八。郎。君。の。嫡。室。白。綾。姫
あ。く。お。り。を。な。る。ん。彼。婦。人。と。保。元。の。播。乱。に。父。忠。國。の。縁。と。も。に。宰。府。小
て。討。た。た。ま。ふ。あ。の。わ。く。の。山。小。脱。と。ま。ふ。もの。飲。ま。か。は。八。郎。御。昔。日。司。を
潛。小。大。嶋。と。脱。と。去。く。夫。婦。この。と。ら。海。に。山。蟻。し。更。一。子。次。奉。た。り。あ。も
あ。れ。を。う。り。に。誘。し。も。人。今。一。度。その。と。ら。再。索。ゆ。と。て。その。真。偽。が。同。諦。に
あ。ん。と。ま。う。は。小。朝。稚。も。い。と。迷。滅。け。れ。は。主。後。好。う。び。山。再。登。り。ん。と。し。ま。ふ
み。奇。な。れ。の。白。雲。簪。然。と。して。前。再。遮。り。忽。地。小。山。次。包。く。何。地。を。行。て

登壇へりもあはれ主後めうびこの不思議を云く。さて父子の再會ハ
 神の許したるなりぬや。今は是れなり。とありけり。次の日豊後不出く
 且暮に道をいそじ日教経つて野州足利へもかり。養父義康不道を
 かりのり。木原山までついでおかり。觸體と鞠をとり出さんせし
 ちあに義康これを見せし。感涙を押し朝稚が至孝ハ天地神明の
 冥加ありて実母の枯骨がかりけり。寔小不測の應報といふべし。且この
 鞠は祖父八幡太郎義家朝臣牛物と名づけて秘藏をすれぬなり。
 嫡孫為義これを相傳し。その後為朝小授るは豫て付たれとあり。あつて為朝
 大嶋の館に火放ぎ。盡死。密小肥後の木原山に脱れし。白蓮小環會
 一子次人出されぬ。あつても彼人の蓋世の義士なれば。子も他も名
 告り。朝稚面あり父よありと。いとも。その像見として。牛の鞠ハ

實母の觸體を携て去りければ。孝子の本意は遂に庶相構て。ついで
 漏しへく。びと密語。厚く時員が芳らひ。これハ引出物。駿賜り。又能江が觸
 體ハ大嚴山の昆沙門堂に葬りて。為頼鬼夜又が追善に至れし。佛堂可憐小
 執行し。多り。と。これハ彼瑞反の刀。牛の鞠と名づ。足利の家に行り。その氏
 のとれ。二男基氏。これハ賜ふ基氏より。氏満。満兼。侍氏と管領四代。個
 りひり。時小應永二十二年十月廿日。侍氏朝臣代々の重宝。瑞反の刀。牛の
 鞠。及舎身。奥州の縮村殿。賜ふ。し。鎌倉大草紙。不々。是と。て。お
 朝推ハ十四歳。めて元服。足利太郎義包。一。他。と。名。吉。多。此。年。養。父。義。康。
 卒去のり。く。 舊説。小義康。と。保元。二年。五月。家。隸。老。黨。相。議。して。義。包。朝。を。傳。え。て。
 足利の家督と。か。て。義。包。ハ。足利の八幡宮。神田縣寄附。又足利の學校。八
 幡宮。勸賞して。祭祀。形。の。く。壯。嚴。を。加。へ。學校。の。結。す。と。人。件。の。學校。を。往。昔。小。野

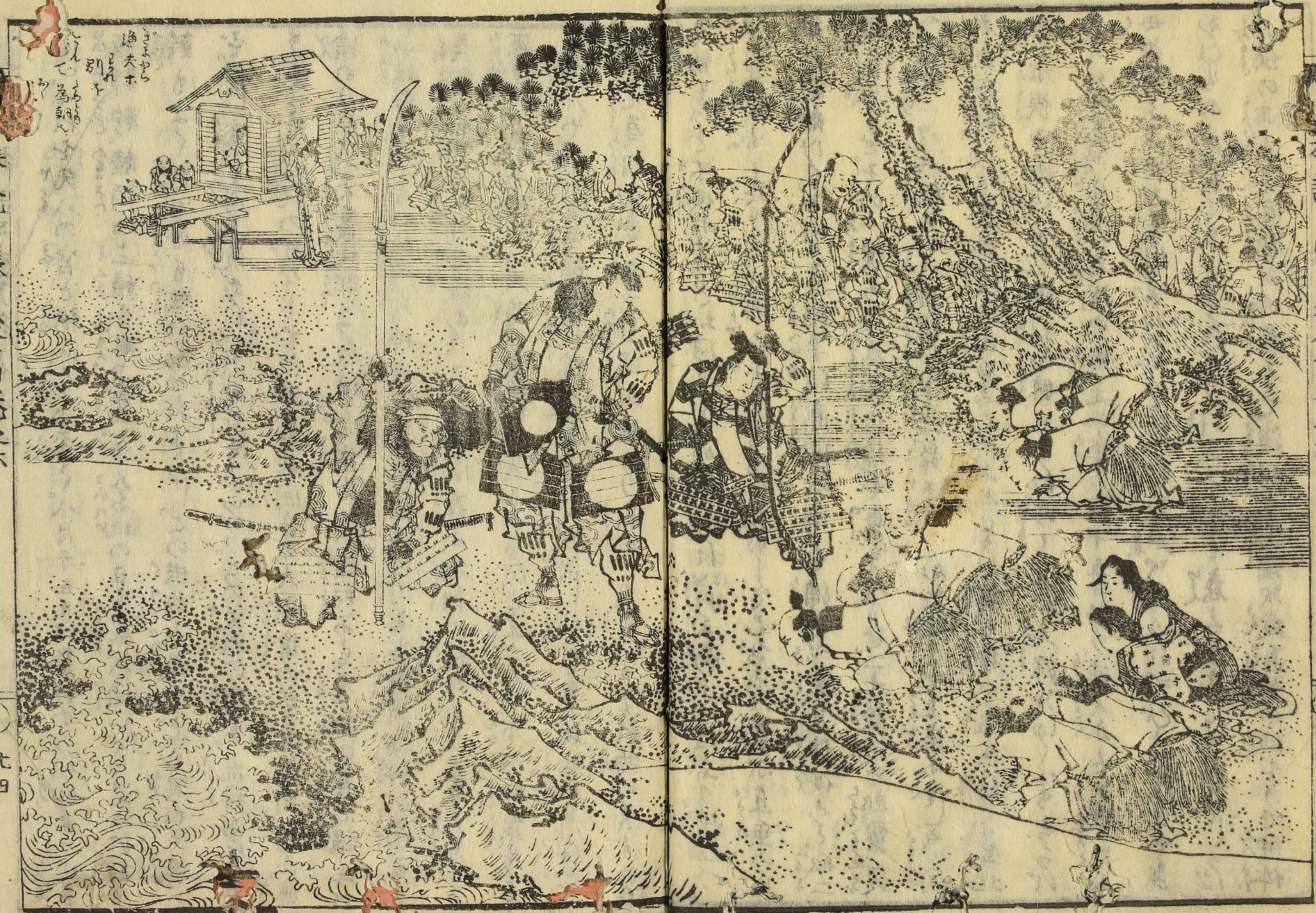
皆勅許を稟て建てる事不知なり。かくて年以て學校の八幡宮回祿志あり。
 又尊氏再興志あり。和漢三才圖會卷之六十六下野の條下に云えり。又足利の
 鏡阿寺ハ義包の建てるなり。彼人実母の菩提の爲に云ふ。寺ヲ建てる事。
 義包の法名ハ鏡阿寺殿と云ふ。これ程に義包ハ養父の篤志ヲ嗣ぎ。いへば。
 八條院の判官代ハ補せられ。その後上野下野武藏赤松の守に任ぜられ。左馬治。
 大輔を拜す。官位後四位下。治元。土御門院の正治元年。家譜云。治元年卒。
 年八十四。その説。亦平法。
 云ふ。その子義氏より。頼氏泰氏家時負氏に至る。五代。東野の藩結あり。負氏
 の子。正慶。後醍醐天皇の勅。八景。而六波羅ヲ攻潰せし。武威天下ハ
 敵多。四海を掌握して。十二代の富貴。皆八幡宮と崇徳院の神助あり。
 是レ我包の功。了俊の難太平記ハ云えり。かくて。ことに證す。

難太平記云。八幡殿と云。義家朝臣陸奥守鎮守府將軍の公子。我國

より義康義包。義氏表氏。なり。表氏を平石殿と云。是レ。御子
 也。頼氏治部大捕殿と云。その御子。家時伊豫守と云。其の御子。
 負氏。讃岐入道殿と云。その御子。御所。錦小路殿。直。
 せり。ある。中畧。柳義包ハ。八尺の身。力人。勝。
 誠。爲朝の子と云。云。義康。緞祿の上より。養。世。
 たり。ひ。頼朝右大臣。珠更。近。
 小。輝。子。空。物。
 云。く。君。と。り。て。物。
 以上伊豫入道
 頼朝記
 朝。推。包。の。子。の。既。并。説。盡。し。ね。そ。も。八。郎。爲。朝。と。朝。推。不。訪。驚。う。され。
 頼。の。以。慊。慨。に。堪。え。ら。れ。し。り。せ。り。か。く。て。あ。れ。る。潜。丹。洛。人。と。せ。り。清。盛

春記長月後篇卷之六

七二



漁夫木
別
為

新編海防

七九

新編海防

九三

し。これ先ハの宮と稱ふ。今小至く。八月十五日に祭礼あり。供物あり。小豆飯。鮮鮓。醴酒の三種を献て。翌年余れの日。扉以開て。こゝろに飯も鮓もよく乾て醴も味ひかりれとす。この供物を荒などもあれ。食へど。色し。盗と食ふ荒あれば。忽地死す。つり。この天ハの宮と。荒神あり。もごとく。祭礼の日なれば。神扉以開て。疱瘡の平安に祈る。應驗ありといふ。又蘆北郡うね津奈木といふ。漢村あり。為朝の宮と稱ふ。小社あり。さうまの双標。神体ととといふ。この外あり。栲列伊丹の南。為朝八幡と稱ふ。神社あり。又尾刈。闇森。小為朝の神社ありと。夫死す。滅され。これを神といふ。苟も俊徳の人よあはれば。千載の下に。庶食とす。みじんや。余嘗て。朝の武徳。稱ふ。依て。今この小説。作す。畢竟。為朝。夫妻。父子。主従。水俣より。秘して。又いふ。物なる。これ

その拾遺六冊に因りてあらば。

書林堂主人誌

○追考甲陽隨筆。小云。巨摩郡。武川。條。武田村の西南。上宮地村。武田八幡宮あり。社頭の雄。山の内に。鎮西八郎。為朝の宮あり。里人。疱瘡。平安の願。これ。應驗ありといふ。古老の説。為朝。伊豆の大鷲より。鬼童。取ら。脱と。今も。非崎の。山。為朝の。遠的。射。多。ひ。つ。れ。と。彼。鬼童。の。位。は。述。及。ワ。塚。と。稱。ふ。あ。れ。ば。為朝の。甲斐。小。伝。と。い。ふ。無。稽。の。談。なり。疑。う。ら。し。き。淺原八郎。為朝の。古。迹。を。誤。傳。へ。鎮。西。八。郎。為。朝。と。い。ふ。や。為。朝。甲斐源氏。なり。巨勢郡。中郡。淺原村。是。其。の。出生。の。地。なり。馬。琴。按。さ。れ。不。録。倉。將。軍。譜。正。應。三。年。の。條。下。云。三。月。甲斐源氏。淺原八郎。為朝。強。弓。の。大。力。なり。諸。國。に。於。て。惡。逆。な。す。と。故。に。所。領。

浅原八郎為朝強弓の大力なり

十四

を没収し。群國をして尋索し。為頼潛小京に入り。夜内裡不到り。紫
宸殿中籠れ。武士これを攻め及ぶ。為頼自殺す。その放す所の
矢小太政大臣為頼と名せり。以かれの甲陽上宮地村を為朝の宮へ
浅原八郎為頼の悪霊を鎮めしめり。因由今に録せり。かれ
訛傳るは多うて。

椿説弓張月後篇卷之六 畢

毎篇歳くその期よかくして發販し。五篇三十冊より。く
完璧と成り。曲亭先生著作数百種の中より。とと
珍賞を以て一奇書なり。

浅辰新表發行

本所松坂里 書舗 平林堂主人誌

和漢 西洋 書籍 賣捌 處

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

大阪心齋橋 勞町角

